往生絵巻

芥川龍之介

童（わらべ）　やあ、あそこへ妙な法師（ほふし）が来た。みんな見ろ。みんな見ろ。

鮓売（すしうり）の女　ほんたうに妙な法師ぢやないか？　あんなに金鼓（ごんぐ）をたたきながら、何だか大声に喚（わめ）いてゐる。

……

薪売（まきうり）の翁（おきな）　わしは耳が遠いせゐか、何を喚くのやら、さつぱりわからぬ。もしもし、あれは何と云うて居りますな？

箔打（はくうち）の男　あれは「阿弥陀仏（あみだぶつ）よや。おおい。おおい」と云つてゐるのさ。

薪売の翁　ははあ、――では気違ひだな。

箔打の男　まあ、そんな事だらうよ。

菜売(なうり)の媼(おうな)　いやいや、難有(ありがた)い御上人(おしやうにん)かも知れぬ。私(わたし)は今の間(ま)に拝んで置かう。

鮓売の女　それでも憎々(にくにく)しい顔ぢやないか？　あんな顔をした御上人が何処(どこ)の国にゐるものかね。

菜売の媼　勿体(もつたい)ない事を御云ひでない。罰(ばち)でも当つたら、どうおしだえ？

童　気違ひやい。気違ひやい。

五位(ごゐ)の入道(にふだう)　阿弥陀仏よや。おおい。おおい。

犬　わんわん。わんわん。

物詣(ものまうで)の女房　御覧なさいまし。可笑(をか)しい法師が参り

ました。

その伴（つれ）　ああ云ふ莫迦者（ばかもの）は女と見ると、悪戯（いたづら）をせぬとも限りません。幸ひ近くならぬ内に、こちらの路へ切れてしまひませう。

鋳物師（いものし）　おや、あれは多度（たど）の五位殿ぢやないか？

水銀（みずかね）を商ふ旅人　五位殿だか何だか知らないが、あの人が急に弓矢を捨てて、出家してしまつたものだから、多度（たど）では大変な騒ぎだつたよ。

青侍（あをざむらひ）　成程五位殿に違ひない。北の方や御子様たちは、さぞかし御歎きなすつたらう。

水銀を商ふ旅人　何でも奥方や御子供衆は、泣いてば

かり御出でだとか云ふ事でした。

鋳物師　しかし妻子を捨ててまでも、仏門に入らうとなすつたのは、近頃健気な御志だ。

干魚を売る女　何の健気な事がありますものか？　捨てられた妻子の身になれば、弥陀仏でも女でも、男を取つたものには怨みがありますわね。

青侍　いや、大きにこれも一理窟だ。ははははは。

犬　わんわん。わんわん。

五位の入道　阿弥陀仏よや。おおい。おおい。

馬上の武者　ええ、馬が驚くわ。どうどう。

櫃をおへる従者　気違ひには手がつけられませぬ。

老いたる尼　あの法師は御存知の通り、殺生(せつしやう)好きな悪人でしたが、よく発心(ほつしん)したものですね。

若き尼　ほんたうに恐しい人でございました。山狩や川狩をするばかりか、乞食なぞも遠矢(とほや)にかけましたつけ。

手に足駄(あしだ)を穿(は)ける乞食　好(い)い時に遇(あ)つたものだ。もう二三日早かつたら、胴中(どうなか)に矢の穴が明いたかも知れぬ。

栗胡桃(くるみ)などを商ふ主(あるじ)　どうして又ああ云ふ殺伐(さつばつ)な人が、頭を剃(そ)る気になつたのでせう？

老いたる尼　さあ、それは不思議ですが、やはり御仏(みほとけ)

の御計（おんはか）らひでせう。

油を商ふ主　私（わたし）はきつと天狗か何かが、憑（つ）いてゐると思ふのだがね。

栗胡桃などを商ふ主　いや、私は狐だと思つてるのさ。

油を商ふ主　それでも天狗はどうかすると、仏に化けると云ふぢやないか？

栗胡桃などを商ふ主　何、仏に化けるものは、天狗ばかりに限つた事ぢやない。狐もやつぱり化けるさうだ。

手に足駄を穿ける乞食　どれ、この暇に頸（くび）の袋へ、栗でも一ぱい盗んで行かうか。

若き尼　あれあれ、あの金鼓（ごんぐ）の音（ね）に驚いたのか、鶏（とり）が
皆屋根へ上（あが）りました。

五位の入道　阿弥陀仏よや。おおい。おおい。

釣をする下衆（げす）　これは騒々しい法師が来たものだ。

その伴（つれ）　どうだ、あれは？　跛（ゐざり）の乞食が駈けて行くぜ。

牟子（むし）をしたる旅の女　私はちと足が痛うなつた。あの
乞食の足でも借りたいものぢや。

皮子（かはご）を負へる下人　もうこの橋を越えさへすれば、す
ぐに町でございます。

釣をする下衆　牟子の中が一目見てやりたい。

その伴　おや、側見（わきみ）をしてゐる内に、何時（いつ）か餌をとら

れてしまつた。

五位の入道　阿弥陀仏よや。　おおい。　おおい。

鴉（からす）　かあかあ。

田を植うる女　「時鳥（ほととぎす）よ。おれよ。かやつよ。おれ
　泣きてぞわれは田に立つ。」

その伴　御覧よ。可笑（をか）しい法師ぢやないか。

鴉　かあかあ。かあかあ。

五位の入道　阿弥陀仏よや。おおい。おおい。

　暫時人声（ひとごゑ）なし。松風の音　こうこう。

五位の入道　阿弥陀仏よや。おおい。おおい。

　再び松風の音　こうこう。

五位の入道　阿弥陀仏よや。おおい。おおい。

老いたる法師　御坊（ごばう）。御坊。

五位の入道　身共（みども）を御呼びとめなすつたかな？

老いたる法師　如何（いか）にも。御坊は何処へ御行きなさる？

五位の入道　西へ参る。

老いたる法師　西は海ぢや。

五位の入道　海でもとんと大事ござらぬ。身共は阿弥陀仏を見奉るまでは、何処（どこ）までも西へ参る所存（しよぞん）ぢや。

老いたる法師　これは面妖（めんえう）な事を承るものぢや。では御坊は阿弥陀仏が、今にもありありと目（ま）のあたりに、

拝ませられると御思ひかな？

五位の入道　思はねば何も大声に、御仏（みほとけ）の名なぞを呼びは致さぬ。身共の出家もその為でござるよ。

老いたる法師　それには何か仔細（しさい）でもござるかな？

五位の入道　いや、別段仔細なぞはござらぬ。唯一昨日（をととひ）狩の帰りに、或講師の説法を聴聞（ちやうもん）したと御思ひなされい。その講師の申されるのを聞けば、どのやうな破戒の罪人でも、阿弥陀仏に知遇（ちぐう）し奉れば、浄土に往かれると申す事ぢや。身共はその時体中の血が、一度に燃え立つたかと思ふ程、急に阿弥陀仏が恋しうなつた。…………

老いたる法師　それから御坊はどうなされたな？

五位の入道　身共は講師をとって伏せた。

老いたる法師　何、とって伏せられた？

五位の入道　それから刀を引き抜くと、講師の胸さきへつきつけながら、阿弥陀仏の在処（ありか）を責め問うたよ。

老いたる法師　これは又滅相な尋ね方ぢや。さぞ講師は驚いたでござらう。

五位の入道　苦しさうに眼（まなこ）を吊（つ）り上げた儘、西、西と申された。――や、とかうするうちに、もう日暮ぢや。途中に暇を費してゐては、阿弥陀仏の御前（おんまへ）も畏（おそ）れ多い。では御免（ごめん）を蒙（かうむ）らうか。――阿弥陀仏よや。

おおい。おおい。

老いたる法師　いや、飛んだ物狂ひに出合うた。どれわしも帰るとしよう。

三度（みたび）松風の音　こうこう。更に又浪の音　どぶりどぶり。

五位の入道　阿弥陀仏よや。おおい。おおい。

浪の音　時に千鳥の声　ちりりりちりりちり。

五位の入道　阿弥陀仏よや。おおい。おおい。――この海辺（うみべ）には舟も見えぬ。見えるのは唯浪ばかりぢや。阿弥陀仏の生まれる国は、あの浪の向ふにあるかも知れぬ。もし身共（みども）が鵜（う）の鳥ならば、すぐに其処へ渡

るのぢやが、……しかしあの講師も阿弥陀仏には、広大無辺（くわうだいむへん）の慈悲があると云うた。して見れば身共が大声に、御仏の名前を呼び続けたら、答位はなされぬ事もあるまい。されずば呼び死（じに）に、死ぬるまでぢや。幸ひ此処に松の枯木が、二股に枝を伸ばしてゐる。まづこの梢に登るとしようか。——阿弥陀仏よや。おおい。おおい。

再び浪の音　どぶりどぶん。

老いたる法師　あの物狂ひに出合つてから、もう今日は七日目（なぬかめ）ぢや。何でも生身（しやうじん）の阿弥陀仏に、御眼にかかるなぞと云うてゐたが。その後は何処（いづく）へ行き居

つたか、――おお、この枯木の梢の上に、たつた一人登つてゐるのは、紛(まぎ)れもない法師ぢや。御坊(ごばう)。御坊。……返事をせぬのも不思議はない。何時(いつ)か息が絶えてゐるわ。餌袋(ゑぶくろ)も持たぬ所を見れば、可哀さうに餓死(うゑし)んだと見える。

三度波の音　どぶんどぶん。

老いたる法師　この儘(まま)梢に捨てて置いては、鴉の餌食にならうも知れぬ。何事も前世の因縁ぢや。どれわしが葬うてやらう。――や、これはどうぢや。この法師の屍骸(しがい)の口には、まつ白な蓮華(れんげ)が開いてゐるぞ。さう云へば此処へ来た時から、異香(いかう)も漂うてはゐた

容子（ようす）ぢや。では物狂ひと思うたのは、尊い上人（しやうにん）でゐらせられたのか。それとも知らずに、御無礼を申したのは、反（か）へす反（が）へすもわしの落度ぢや。南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。

（大正十年三月）

底本：「現代日本文学大系43芥川龍之介集」筑摩書房
1968（昭和43）年8月25日初版第1刷発行
入力：j.utiyama
校正：earthian
1998年12月28日公開
2004年2月18日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。